

県立大学での15年間

庄司 知恵子

15年間勤務いたしました岩手県立大学社会福祉学部を、今年度末をもって退職することになりました。着任前までは大学院生でしたので、社会人としての経験が全くなく…、何もわからないまま、社会人生活がスタートしました。多くの失敗・失礼をいたしました。先生方、事務の皆様方が温かくご指導くださったおかげで、なんとか15年間、勤めることができました。多くの皆様に、この場を借りて感謝申し上げます。ありがとうございます。

さて、私の専門は「農村社会学」であり、社会学領域でも非常にマイナーな領域となります。そんな私が「社会福祉学部」にいることの意味について考えた15年間でした。この点について、いくつかの思い出話をしたいと思います。

まずは教育の面において。毎年、沢山ではありませんがポツポツと学生さんが庄司ゼミを選んでくれました。私のゼミを選んだ理由は、「庄司先生は『福祉』じゃなくても対応してくれるから」と。その意味をどう考えるべきか悩みつつも、同時に福祉をすごく狭い概念として捉えている学生の姿に気が付きました。福祉を「しあわせ」という広義の意味から考えると、卒論のテーマとして扱われた農村直売所や伝統和紙の話も、「福祉なんだけどなあ」。地域における「幸せな場」を、みんなで作り上げ、共有し、なぜ、どうやって維持していくのか、それらを明らかにすることも「福祉なんだけどなあ」。それをうまく説明できない自分にもどかしさを感じていました。そして、福祉学部にながら「王道の福祉」になじめない学生さんをどうやってフォローしたらよいものか、考えさせられました。振り返ると、そういった人たちにゼミを通して「居場所」提供できたのかな、また、社会や福祉を捉える際の多様な視点を提供できたのかなと思っております。

社会福祉学部における調査教育も自分の研究と教育の接続を考えるうえで大切な時間となりました。農村社会学は調査を重要な作業として位置づけており、私も「フィールド調査だけは誰にも負けない」と自負しておりましたが、一般的に考えて資格養成学部において、調査教育を展開するのは困難とされておりました。

そのような中ではありましたが、開学以来、実学実践の大切さからフィールドにでることを重視した教育が本学部では展開されており、その一つとして調査実習がありました。学生教員共々忙しい中で、学生に対して有益な授業内容を提供するために、何を削り何を重視すべきかということ、担当教員間で議論できたことはとても有意義な時間でした。私の「こだわり」「わがまま」に付き合ってくくださった先生方には感謝しかありません。ありがとうございます。

研究と社会貢献の展開においては、東日本大震災と自身の出産／育児とが大きな転換点となりました。東日本大震災直後、実学の研究者は被災者／被災地と積極的に向き合う中、社会学は無力でした。研究仲間と話せば話すほど、何もできない自分たちに焦りを感じました。その最中、妊娠・出産・育児を経験することとなり、自分が今すべきことは、目の前にいる子をきちんと育てることなんだなと思い、育児に励みましたが、やはり研究をしたいという思いは日に日に募り…。そんなときに、共同研究のお誘いを受け、子を前抱っこし、大きなリュックを背負い、左右の手には荷物を持ち、宮城県石巻市北上町を初めて訪れたのは長男が8か月の頃でした（あまりの装いに周囲もびっくりしてか、子連れ新幹線で嫌な思いをすることもなく…）。その後も北上に足を運びましたが、調査中は調査対象者がわが子の面倒を見てくれました。気づくとわが子は12歳。北上を舞台にして納得のいく論文を出せたのは昨年のこと。私が社会学者として地域のお役に立つためには12年の年月が必要だったのだなと思うと同時に、地域が「変わる」「動く」にはやはりこれだけの年月がかかるのだなあと思ったものでした。

長男を出産し、職場復帰後に教職協働で成し遂げた休日託児実践は、岩手県立大学で過ごした中でとても大切な思い出となっております。教員と職員が協働し、休日勤務の際の託児を行い、2年後にその実践は大学業務として扱ってもらえることになりました。通常業務をこなしながら、託児の形を作っていくことは簡単なことではありませんでした。しかし、自分が困っていることは、みんなが困っていることであり、それを

きちんと社会に伝えていくことの大切さ、問題解決のためにみんなで協力していくことの大切さを、仲間たちが教えてくれました。2人目を出産した2018年からは、この託児実践をきっかけに、ワークライフバランスについての仕事を依頼されるようになりました。「ワークライフバランスの専門家ではないんだけどな…」という思いはありつつも、自分や知り合いが、働きながら子育てをする中で、何に悩んでいるんだろうかということを考える作業は「社会とつながる」大切さを私に伝えてくれました。2023年度は、医療的ケア児を育てる家族にとってのワークライフバランスについて考える機会を持つことができました。たまたまわが子が通う小学校で医療的ケア児が入学をした、というニュースを見たのがきっかけとなります。2021年に施行された医療的ケア児支援法により可能となったものでした。それまで、障害のある家族や医療的ケアが必要な子がいる家族は、当事者のケアに時間を使っている、ということを知っていましたが、そのニュースをみて、働くという選択も、働かないという選択も、選択肢としては提示されてこなかった人たちがいるということを知りました。医療的ケア児支援法では、家族の離職防止が掲げられ、当事者と家族と社会をつなぐ画期的な視点であることを教えてもらいました。これらの出来事は、自分が分からない、知らないということを理由に、「考えなくてもよい」ということにはならない、そして、「知ろう」「知りたい」ということは、社会を考えるうえでとても大切な原動力であることを、教えてもらいました。

奥州市北股地区の皆さんとの出会いも忘れてはなりません。「農村社会学がきちんとできていないんだよね…」という、おそらく飲み会の場でのボヤキを覚えていた菅野道生先生（淑徳大学）が誘ってくれた北股地区でのボランティア実践は、「地域福祉」について考える機会を提供してくれました。また、私が研究者を目指すきっかけとなった「秋田県藤里町」での出会いを思い出させてくれました。私は卒業課題研究で秋田県藤里町における自殺予防活動をテーマにまとめたのですが、そこで出会った調査対象者の方がこんなことを私に伝えてきました。「私だって、この町を出たかったのよ。でもね、ここにいるって決めたからには、自分が住んでいる町が、住民を自殺に追い込んでしまうような町ってこと、さみしいじゃない？」と。私自身も田舎の町の出身で、「田舎の町なんて…」という

思いが少なからず心の中にあり、そんなときに自分自身の浅はかさ、幼さを思い知らされた出来事でした。藤里町での自殺予防活動の展開は、その後、大きな評価を得ることになりますが、はじめはそういった日々の思いであることを忘れずに、どうやったらこのような思いを、大きな議論にからめとられずに、地域づくりとして結び付けていくことができるかということが、その後の私の研究テーマとなりました。とはいえ、子育てや学務といったことを理由に、そのテーマを正面から扱わないようになっている自分にも気が付いていました。そんなときにしてしまったボヤキが先の話になります。北股は、江戸時代の旧村となりますが、現在は140世帯、人口500人ほど、高齢化率は50%前後と、過疎高齢化の進んだ中山間地域です。そこでは、どうしたら楽しいことができるか、どうしたらみんなでこの地域で生きていけるか、ということ、日々考えている人たちがいます。こういった人たちの思いを横（空間的に）に縦（時間的に）につなげていくために、「地域福祉」の取り組みが必要であることを、実践を通して知りました。しかし、現場では縦割りを理由に地域福祉は困難な状況に置かれています。農村RMOを巡る課題は本当にこの点が大きく、それをどう乗り越えるのか、ということが最近の私の研究テーマとなりました。実は、「藤里」での卒論の内容も、今になって気が付いたのですが、縦割りによる「地域福祉の困難性」について考えるものでした。つまり、県立大学で過ごした15年は、私の研究のスタート地点での間に解決方法を提供してくれた15年でした。

1～2枚で書いてくださいと言われた、この文章。「1枚も書けるかな～」と思ったら、書けました。つまり、それくらい私にとっての県大での15年は密度濃いものであったわけです。研究も、教育も、子育ても、私の社会人スタートの場が県大だったからこそ、なんとか乗り越えることができたものと思います。本当に多くの方に支えていただきました。出会ってくださった皆様に感謝いたします。ありがとうございました。そして、これからもどうぞよろしく願いいたします。